

ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働と役割分担 — フランス語学科とドイツ語学科の学生が考える教員の資質・能力 —

中 川 良 雄
橋 本 政 義
舟 杉 真 一

〈Abstract〉

We have recently often observed an array of communication-focused methods, in which the researchers have been devising ways to improve the learners' communicative competence by making active use of native-speaker teachers. We have concurrently observed changes of qualities and abilities required for teachers.

The authors of this paper have examined “qualities and abilities required for teachers of Japanese” and “excellent foreign language classes” from various perspectives.

Here are a few questions that we have come up with along the way.

Are a series of findings that we have so far observed specific to Japanese language education? Would it be possible to discuss these findings under the common concept of “language education,” in lieu of dealing with various issues in different shells such as Japanese language education, English language education, Chinese language education, French language education, and so forth? Or would it be possible to exchange with each other expertise stored in each of the different fields, so that we could utilize the common pedagogical assets for the sake of the betterment of foreign language education in general? Would it be even possible to hammer out qualities and abilities needed for foreign language teachers on the basis of the individuality of each language and the commonality (universality) of foreign language education?

The main purpose of this research is to work out ways to inquire about qualities and abilities that native speaker teachers (NST) / non-native speaker teachers (NNST) are to be equipped with for the sake of developing excellent foreign language classes as well as to search for good ways for NSTs and NNSTs to collaborate and cooperate with each other.

The authors believe that it is possible to conceptualize “excellent foreign language classes” by delving into the linguistic individuality and the pedagogical commonality (universality) via our survey results as to what the teachers' roles are and what qualities and abilities the learners expect of NSTs and NNSTs. If we can find out what the teachers are expected of, then the findings will not only help to facilitate teacher-training but also to improve the necessary qualities and abilities for good teachers.

We have already discussed in the previous paper, on competence s and abilities required for English and Chinese teachers. We are going to discuss of those required for French and German teaching.

はじめに

外国語教育に求められる学習者のニーズは、時代の移り変わりとともに変化しつつある。従来の知識注入型教育から、学習者の主体性に重きを置いた、コミュニケーション重視の方法論へと主眼を映しつつある。それと同時に教員に求められる資質や能力も変化してきている。

ネイティブ教員を積極的に活用し、学習者のコミュニケーション能力を伸ばさせる方策が採られているが、ノンネイティブ教員との連携や協働により「優れた」外国語授業創出のための役割分担も重要な課題となる。

論者は、これまでに「求められる日本語教員の資質・能力」や「優れた外国語授業」について様々に考察してきた中川（2010, 2011a, 2011b, 2012a, 2012b, 2012c, 2014 等）。

ここで次のような疑問が浮かび上がる。

これまでの一連の知見は、はたして日本語教育に特化したものか。日本語教育、英語教育、中国語教育やフランス語教育といった、それぞれの領域の殻に閉じこもるのではなく、「外国語教育」という共通した概念のもとで議論することはできないか。またそれぞれの領域で蓄積されている知見を交換し、共通財産として「外国語教育」の進展に活かしていくことはできないか。外国語教員として求められる資質や能力は、それぞれの言語の個別性と外国語教育という共通性（一般性）の上で議論することができるのではないか。

本研究は、「優れた外国語授業」創出のためのネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力を問い、両者の連携・協働のあり方を模索することを主目的とする。

そのため本研究では、教員の役割分担やネイティブ／ノンネイティブ教員の資質や能力について学習者が何を求めるかを問うアンケートを基礎資料とし、個別性と共通性（一般性）を探ることにより、「優れた外国語授業」の概念化が図れるものとする。

前稿（中川・岡本・倉田, 2018）では、京都外国語大学中国語学科と英米語学科の学生を対象とした「ネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力」について問うたアンケート結果を報告した。本稿では、前稿で得られた結果が、フランス語学科、ドイツ語学科の学生にも有効か、外国語教育に共通の一般性と目標言語ごとの特殊性の関連性を問う。

教員に求められる資質・能力や役割分担が明らかになれば、「優れた」外国語授業の創出はより容易になるばかりか、教員の養成にも明確な指針が示されるであろう。

1. 本研究の位置づけ

前稿（中川・岡本・倉田, 2018）でも掲げた本稿の位置づけ（目標）を次のように考える。

この方面での研究は、田中（2013）「日本語教育における『ネイティブ』／『ノンネイティブ』概念——言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから——」、平畑（2008）「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割——母語話者性と日本人性の視点から——」、大藪

(2007)「英語で教える英語の授業」：非母語話者教員をとりまく状況分析と理論的枠組み」など、少なからず存在するが、いずれも日本語教育や英語教育、また、中国やベトナムといった個々の集団内の議論にすぎず、外国語教育を一般化・概念化した研究は管見の限りない。外国語教育を一括りとした、外国語教員に関する議論やその養成に関する議論もなされていない。

そこで当研究を次のように位置づけることができる。

- それぞれの言語教育において、ネイティブ／ノンネイティブの連携・協働による「授業実践報告」や教員の「役割分担」に関する調査研究は、大学紀要や大学紹介冊子、各々の教員の所属学会・研究会等で個別に報告がなされ、外国語教育の参考に供されているが、それらを集大成した、日本語や英語といった枠を超えた超言語的観点からの調査研究はこれまでに存在しない。
- 外国語教員の養成は、当該言語能力の向上に主眼が置かれ、人間性を含む教員の資質や能力全般に関する研究には目が向けられていない。
- 教育方法論の改善、新たな教育方法の構築につながる。
- 外国語大学の使命とする外国語教育の進展に多大に寄与し、外国語教育メソッドの改善と新たな可能性を切り拓く。時代に呼応した外国語教育を探求する。

2. ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働に関する先行研究

外国語教育に求められる教員の資質や能力について、まずは英語教育に求めてみる。

2.1 英語の授業で求められる教員の資質・能力

石田・緑川他(2004)は、英語教員に「授業で求められる資質・能力」の要件について、次のように挙げている。

1. 『英語で効果的に授業を行うための「英語力」』の要件

(1) 中学校教科書指導の場合

- ・「目標値」以上の能力（能力試験で測れる英語力）
- ・授業で「教室英語」, 「練習」, 「導入」, 「スモールトーク」を英語で行う能力, など

(2) 中学校での協同授業と高校 OG での協同授業の場合

- ・「目標値」以上の能力
- ・ALT から「情報を引き出す力」
- ・ALT に生徒を訓練させる力
- ・平易な英語で言い換える力
- ・ALT と共同でモデルを示す力
- ・ALT と交渉をする力
- ・ALT に指示をする力, など

2. 『英語で効果的な授業を行うための「英語教授力」』の要件

中学校教科書指導の場合

- ・自己表現活動を指導する力
- ・絵などの補助教材を使って英語で説明する力
- ・生徒に本文などを暗記させるまで音読させる力、など

上記から分かることは、英語教員には、所属機関における一般職員であること以上に、相当な英語力が求められているということである。

2.2 ALT 教員（ネイティブ教員）に求められる資質・能力

JET プログラムは、平成 27 年度の応募条件を 18 項目にわたり詳細に記載している¹⁾。

それらをまとめると、外国語指導助手（ALT）に求められる資質・能力として、学士以上の資格を有し、母語で適切な言語運用が可能であることに加えて、日本や日本の外国語教育に理解と関心があり、子どもと積極的にかかわろうとする意欲のあることが条件となる。

2.3 ネイティブ教員とのチーム；ティーチング

文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室では、「(別紙) 文部科学省が一般的に考える外国語指導助手（ALT）とのチーム・ティーチングにおける ALT の役割について記載がある²⁾。

ノンネイティブ教員は、担任（ネイティブ教員）の教材作成や音声等の補助をし、チーム・ティーチングに当たるべきことを強調している。

2.4 ネイティブ／ノンネイティブ教員の利点

ネイティブ／ノンネイティブ教員の利点に関する研究では、日本語教育に関するものが比較的盛んである。

国際交流基金が実施する日本語教師長期研修の方針の報告書の中で、阿部・横山（1991）は、ノンネイティブ教師の利点を「学習者と母語や文化を共有し、学習者としての経験が活かされる」ことを挙げている。

石井（1991）も、ノンネイティブ教員の利点について同様の認識を示しつつ、「学習者と文化を共有する」ことに置いている。

一方でネイティブ教員にはどんな役割が期待されているのか。

平畑（2008）は、「母語話者と共存し、母語話者にパートナーシップを期待するものへと変化しつつある」と指摘し、平畑（2007）では、海外での教授経験のある日本語教師への質問紙調査から、「意欲」「人間性」「教育能力」「コーディネート能力」「国際感覚」「日本人性」という 6 因子を抽出している。

では学習者の視点からは、どのような教員が望まれるのだろうか。

縫部他（2006）は、「『優れた』日本語教師の行動特性」について共通して、「日本語教師の専門性」「教師の人間性」「授業の実践能力」「コース運営」「指導経験と資格」という5因子が「『優れた』日本語教師」の枠組みを構成していることが明らかにした。

本章で述べてきたことは、日本語教育・日本語教員に特化した先行研究の紹介ではあったが、ネイティブ／ノンネイティブ教師に求められる資質や能力は、言語を問わず共通した概念として認識することができるであろう。超言語的な一般性に言語それぞれの個性が加わるものと考えてよい。

2.5 外国語教育におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と連携・協働

上記観点からわれわれは、外国語教育の一般化と個別化を探索すべく、英語や中国語、スペイン語といった外国語教員に求められるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力についてアンケート調査を実施している。前稿（中川・岡本・倉田，2018）においては、京都外国語大学英米語学科と中国語学科の学生が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質や能力に関するアンケート結果を報告した。

結果をおしなべて述べると、次のようになる。

ノンネイティブ教員には、自らが学習者であったことから、学習者と価値観や文化を共有し、習得が困難なことと容易なことを熟知している。つまり学習者にとっては、ロールモデルとして、教員からの授業やアドバイスを享受する。

一方でネイティブ教員には、目標言語でのコミュニケーションを可能にしてくれる役割が求められる。ネイティブであるがゆえ、カルチャーモデルとして、目標文化の伝授者・紹介者となる。

中国語は、学習者にとって初習言語、英語は既習言語であるため、ネイティブ英語教員には、より強く学習者との英語によるコミュニケーションや授業技能が求められるであろう。

このような資質や能力を備えたネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働により、「優れた外国語授業」が創出されるものと考えられる。

英語や中国語教育で見えてきたネイティブ／ノンネイティブ教育の連携・強度や役割分担は、果たして他の外国語教育でも一般化を図ることができるか。本研究の立ち位置は、まさにそこにある。

3. フランス語学科・ドイツ語学科学生を対象とした調査

京都外国語大学フランス語学科・ドイツ語学科の学生を対象に、ネイティブ／ノンネイティブ教員に求める資質・能力について問うアンケートを実施した。

3.1 アンケート項目の策定

質問紙の作成に当たっては、縫部他（2006）が作成した41項目を参考に、本論の趣旨である、

「ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働，や「役割分担」に鑑み，質問項目を若干追加・削除して40項目とした。またネイティブ／ノンネイティブ教員ともに同一項目で問うたが，ネイティブ教員に関する項目では，試験・留学経験にかかる酷目（38～40）を削除した。

日本人（ノンネイティブ）教員及びネイティブ教員に求められる資質や能力について，それぞれ40項目（37項目）を4件尺度法（4：強く求める，3：求める，2：あまり求めない，1：全く求めない）で問うた。

それぞれの項目の平均値を出していく。アンケート項目については，巻末付表参照。

3.2 調査期間

2016年12月～2017年1月。

3.2 調査協力者

フランス語学科（146名）

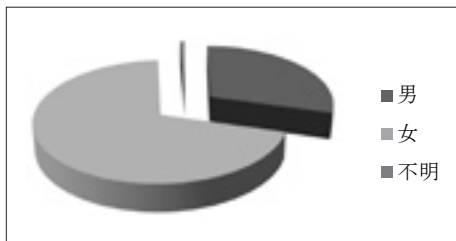


図1 フランス語学科 男／女の別

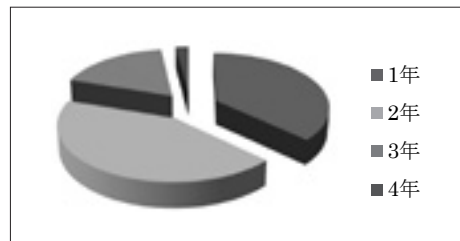


図2 フランス語学科 学年の別

ドイツ語学科（186名）

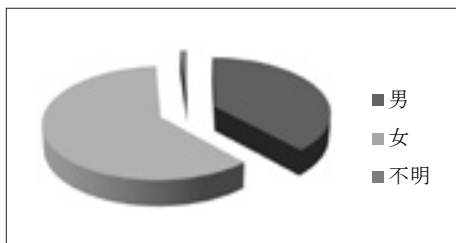


図3 ドイツ語学科 男／女の別

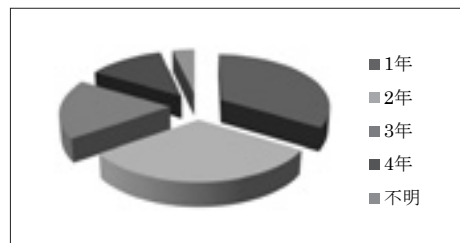


図4 ドイツ語学科 学年の別

上図1～4のごとく，フランス語学科・ドイツ語学科に在籍する学生に対し，偏りなく（男・女）については，学生比率を反映している）調査が施されており，調査対象者が結果を左右するものではないと思われる。

4. 調査結果

付表1より、フラン語学科・ドイツ語学科の学生が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力上位10を選び出してみる（付表1より平均値の高いもの）。

表1 フランス語学科・ドイツ語学科の学生が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力

ノンネイティブ教員に求めるもの	ネイティブ教員に求めるもの
【フランス語学科】	
すべての学習者に公平である	正しい発音やアクセントで流暢に話せる
学習者の文法上の間違いを適切に訂正する	授業を楽しくする
授業を楽しくする	学習者の発音上の間違いを適切に直せる
正しい発音やアクセントで流暢に話せる	フランスの歴史や文化・習慣などについて深い知識がある
フランスの歴史や文化・習慣などについて深い知識がある	すべての学習者に公平である
教室外でも話しやすく親しみやすさを感じる	教室外でも話しやすく親しみやすさを感じる
学習者の発音上の間違いを適切に直せる	フランス文化を授業の中で体験させてくれる
進学や就職などの知識が豊富である	教室を和やかでくつろいだ雰囲気にする
フランス人の考え方や思考方法を理解している	コミュニケーション重視の練習をたくさん取り入れる
外国語としてのフランス語教授法に精通している	話すこと・聞くことを中心に教える
【ドイツ語学科】	
教室外でも話しやすく親しみやすさを感じる	翻訳や通訳の練習を取り入れる
日本語と学習者の母語を比較しながら教える	学習者の文法上の間違いを適切に訂正する
習得が困難なことと容易なことをよく知っている	ドイツ語だけで授業をする
教室を和やかでくつろいだ雰囲気にする	すべての学習者に公平である
教師として威厳のある態度で学習者に接する	ドイツ語と学習者の母語を比較しながら教える
すべての学習者に公平である	習得が困難なことと容易なことをよく知っている
学習者にドイツ語で話すことを促す	宿題を適度に出し、きちんとチェックする
学習者だった時の経験を活かして教える	進学や就職などの知識が豊富である
授業を楽しくする	教室を和やかでくつろいだ雰囲気にする
学習者の発音上の間違いを適切に直せる	教科書に沿って文法を重点的に教える

本論の趣旨は、外国語教育全般に共通する、ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる概念としての資質・能力の抽出にあるが、前稿と併せて考えるに、ネイティブ／ノンネイティブあるいは言語を問わず求められるのは、

- 教室を和やかで楽しくする
- 教室外でも親しみやすい
- 目標言語文化を紹介する
- 正しい発音で目標言語を話す

等であり、ノンネイティブ教員には、

- 学習者としての経験から習得が困難な項目と容易な項目を知っている
- 進学や就職の相談に乗る

等の役目が課され、ネイティブ教員には、カルチャーモデルとして、

- コミュニケーションとしての目標言語
- 話すこと・聞くことを中心に教える

等が求められる。

また言語による特殊性として、ドイツ語教員には、フランス語教員に比して、

- 権威ある態度で学習者に接する

ことも求められる。

中等教育におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の役割同様、ともに組織の一員として、互いの不足点を補いながら役割を果たしていくことが「優れた」外国語授業に結び付くことはいうまでもなく、学習者の学習意欲を起こさせることになろう。

フランス語学科、ドイツ語学科それぞれの調査対象者について、男女別・学年別有意差の有無を検定したが、有意差は現れなかった。本結果は、京都外国語大学フランス語学科・ドイツ語学科の学生が、ネイティブ・ノンネイティブ教員に求める資質・能力やネイティブ・ノンネイティブ教員の連携・協働のあり様を示すものと考えてよい。

おわりに

本稿の趣旨は、超言語的観点から、言語一般に共通するネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる概念の抽出にあるが、ネイティブ／ノンネイティブ教員の役割分担は可能であろうか。ネイティブ／ノンネイティブ教員の特技を活かして、両者の連携・協働が探求されれば、外国語授業に効果のもたらされることが期待される。

つまり言語教育一般に共通する概念があり、教員には、概念としての資質・能力が求められ、各々の言語には、共通性の上に個別の概念が付加されるという構造をなす。

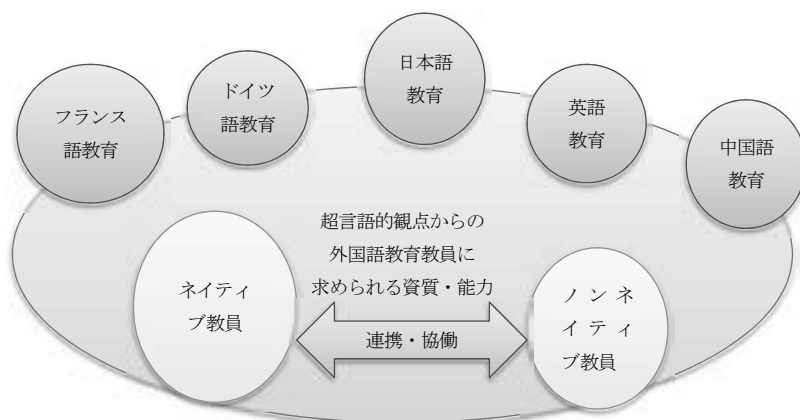


図5 超言語的観点からのネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働

注

- 1) JETプログラムは、平成27年度の応募条件を次のようにまとめている。
 - (1) 日本について関心があり、参加者となった後もすすんで日本に対する理解を深める意欲があること。日本の地域社会における国際交流活動に参加する意欲があること。
 - (2) 心身ともに健康であること。
 - (3) 日本で職務に従事し、生活に適応する能力を有し、責任を持って任用期間の職務を全うする意志があること。
 - (4) 外国語指導助手又は国際交流員に応募する者は、大学の学士号取得者又は指定の来日日までに学士号取得見込みの者であること。(外国語指導助手に応募する者は、3年以上の初等学校若しくは中等学校の教員養成課程を修了した者又は指定の来日日までに同課程を修了見込みの者であることでも可。)
 - (5) 応募時に、募集選考国の国籍(永住権ではない。)を有すること。なお、日本国籍を有する者は参加同意書提出期日までに日本国籍を離脱する届け出を行うことに留意すること。日本以外の多重国籍を有する者は一つの対象国籍者として応募できる。
 - (6) 指定言語(注3参照)について、現代の標準的な発音、リズム、イントネーションを身に付け、正確かつ適切に運用できる優れた語学力を有していること。また、論理的に文章を構成する力を備えていること。
 - (7) 2013年度以降(2013年4月指定来日日以降)のJETプログラムに参加しておらず、かつ、過去の参加累計期間が5年以下であること。
 - (8) 前年度JETプログラムに合格し、配置先決定の通知後、辞退した者でないこと。ただし、やむを得ない事由があると認められる場合を除く。
 - (9) 応募時まで、2006年以降合計して6年以上にわたり日本に居住していないこと。
 - (10) 本プログラム終了後も日本との交流に積極的に関与する意欲を有していること。
 - (11) JETプログラムに参加するための我が国への入国に際して、出入国管理及び難民認定法第2条の2に定める在留資格をもって在留することに同意すること。
 - (12) 日本国法令を遵守する意志を有すること。
 - (13) 犯罪に係る刑罰等の執行猶予を受けている者においては、応募時まで執行猶予期間を満了していること。

英語圏以外の国の場合

(14) 英語又は日本語の実用的能力を有すること。

外国語指導助手については、一般要件のほか、更に以下の要件を必要とする

(15) 日本における教育、特に外国語教育に関心があること。

(16) 積極的に子ども達と共に活動することに意欲があること。

(17) 語学教師としての資格を有する者又は「語学教育」に熱意がある者。

※ 応募要件ではないが、次のような要件に該当する応募者には選考にあたり一定の評価が追加的に与えられる。

1) 語学教師としての経験又は資格を有すること。

2) 教職経験又は教職資格を有すること。

3) 高い日本語能力を有すること。

国際交流員については、一般要件のほか、更に以下の要件を満たすこと

(18) 日本語の実用的な能力を有すること（日本語能力試験 N1～N2 レベル相当）。

すなわち外国語指導助手（ALT）に求められる資質・能力として、学士以上の資格を有し、母語で適切な言語運用が可能であることに加えて、日本や日本の外国語教育に理解と関心があり、子どもと積極的にかかわろうとする意欲のあることが条件となる。

2) 学級担任または教科等担当教員（以下「担当教員」という。）と ALT とのチーム・ティーチングにおける ALT の役割は以下のとおり。

○ ALT は基本的には担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業にかかる補助をする。

(1) 授業前

学校（担当教員）が作成した指導計画・学習指導案に基づき、授業の打ち合わせを行うとともに、教材作成等を補助する

* 授業の目的、指内容を理解

* 指導手順、指の役割分担、教材等を把握

* 教材作成やの補助

(2) 授業

担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業を補助する。

(ALT が行う役割の例)

○ 言語活動における児童生徒に対する指導の補助活動についての説明、助言、講評

* 言語モデルの提示

* 音声、表現、文法等についてのチェックや助言

* 児童生徒との会話

参考文献

阿部洋子・横山紀子（1995）「海外日本語長期研修の課題：外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて」『日本語国際センター紀要』第1号，国際交流基金日本語国際センター，pp. 54-71.

石井恵理子（2006）「非母語話者教師の役割」『日本語教育学』第15巻2号，pp. 87-94.

石田雅近・緑川日出子他（2004）「英語教師が備えておくべき英語力の木放置に土江の研究」『平成15年度文部科学省諸島中等教育局国際教育課委嘱研究「英語教育に関する研究」報告書』(jetprogramme.org/ja/eligibility/（2018年1月7日検索）。

大藪加奈（2007）「英語で教える英語の授業」：非母語話者教員をとりまく状況分析と理論的枠組み」Forum on Language Linguistics, Volume 1, pp. 26-35.

田中里奈（2013）「日本語教育における『ネイティブ』／『ノンネイティブ』概念——言語学研究お

- よび言語教育における関連文献のレビューから——『言語文化教育研究』11, 早稲田大学日本語教育センター言語文化教育研究会, pp. 93-111.
- 中川良雄 (2010) 「中国の日本語学習者が考える『いい授業』」『研究論叢』第75号, 京都外国語大学, pp. 143-157.
- (2011a) 「中国・台湾・香港の日本語学習者が考える『いい授業』」『研究論叢』第76号, 京都外国語大学, pp. 271-290.
- (2011b), 「教室文化の多様化に対応した『いい授業』——中国と韓国の学習者が考える『いい授業』」『無差』第18号, 京都外国語大学日本語学科, pp. 3-10.
- (2011c) 「教室文化から見た『いい授業』観——オーストラリアの日本語学習者が考える『いい授業』——」『研究論叢』第77号, 京都外国語大学, pp. 149-159.
- (2012a) 「日本語学習者の教室文化と『いい授業』観——中国・台湾・香港・韓国の日本語学習者が考える『いい授業』——」『教室文化の多様化に適応した日本語教員の養成をめぐる学際的研究』(平成21年度～平成23年度京都外国語大学学内共同研究研究成果報告書, 研究代表者: 中川良雄), 京都外国語大学, pp. 1-10.
- (2012b) 「中国の日本語教員が考える『いい授業』」, 『研究論叢』第78号, 京都外国語大学, pp. 224-236.
- (2012c) 「タイの日本語学習者が考える『いい授業』——中国の日本語学習者との対比から——」『研究論叢』第79号, 京都外国語大学, pp. 239-249.
- (2013) 「日本語教育実習生の『いい授業』観の認知変容——京都外国語大学留学生別科での教壇実習から——」『無差』第20号, 京都外国語大学日本語学科, pp. 1-14.
- (2014) 「教室文化と『いい授業』『いい先生』——中国大陸・アイ湾地区・香港地区の学習者が考える『いい授業』——」『中国日語教学文集之10 中日跨文化交際研究 異文化理解につながる日本語教育・日本学研究』大連理工大学出版社, pp. 488-496.
- 中川良雄・天満理恵・上野山愛弥・安立友野 (2011), 「教室文化の多様化と『いい授業』観——オーストラリアと中国の大学生が考える『いい授業』——」『日本語教育方法研究会誌』Vok. 18, No. 1, 日本語教育方法研究会, pp. 66-67.
- 中川良雄・長濱拓磨・石井香織 (2011) 「教室文化の多様化と『いい授業』観——韓国の日本語学習者が考える『いい授業』」『日本語教育』第55号, 韓国日本語教育学会, pp. 13-23.
- 中川良雄・長濱拓磨 (2012) 「日本語教育実習生の『いい授業』観に関する認知・変容——韓国での日本語教育実習から——」(平成21年度～平成23年度 京都外国語大学学内共同研究研究成果報告書, 研究代表者: 中川良雄), 京都外国語大学, pp. 11-21.
- 中川良雄・スィラダー プンサーム (2012) 「タイの日本語学習者が考える『いい授業』」『日本語教育方法研究会誌』vol. 19, No. 1, 日本語教育方法研究会, pp. 60-61.
- 中川良雄・岡本俊裕・倉田誠 (2018) 「ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力——中国語学科と英米語学科の学生が求める資質・能力——」『研究論叢』第90号, 京都外国語大学, pp. 141-153.
- 縫部議憲・渡邊倫子 (2006) 「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』(平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, 研究代表者: 中川よ雄), pp. 94-105.
- 平畑奈美 (2007) 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質——グラウンデッド・セオリーによる分析から——」『早稲田大学日本語教育研究』第10号, 早稲田大学, pp. 31-44.
- (2008) 「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな枠割——母語話者性と日本人性の視点から——」『世界の日本語教育』18, pp. 121-139.

【付表1 アンケート結果】

No	項 目	NNT	NT	NNT	NT
1	絵教材や視聴覚教材など、さまざまな教材を多く用いる	3.12	3.28	3	3.25
2	外国語としての日本語教授法に精通している	3.39	3.42	3.34	3.36
3	学習者からの質問に即座に答えられる	3.37	3.56	3.28	3.41
4	学習者に日本語で話すことを促す	2.81	3.22	2.69	3.25
5	学習者の発音上の間違いを適切に直せる	3.47	3.71	3.36	3.63
6	学習者の文法上の間違いを適切に訂正する	3.63	3.56	3.61	3.42
7	教科書に沿って文法を重点的に教える	3.03	2.8	3.16	2.84
8	教室外でも話やすく親しみやすさを感じる	3.49	3.65	3.45	3.52
9	教室外や課外でも学習者と交わることが多い	3.15	3.45	2.98	3.28
10	教室内において学習者に規律を守らせる	2.9	2.95	2.87	2.95
11	教室を和やかでくつろいだ雰囲気にする	3.21	3.58	3.1	6.4
12	教師として威厳のある態度で学習者に接する	2.67	2.71	2.49	2.65
13	コミュニケーション重視の練習をたくさん取り入れる	3.2	3.58	2.99	3.47
14	コンピュータ教材を用いて授業を進める	2.45	2.4	2.3	2.21
15	試験（JLPT など）についての知識が豊富である	3.32	2.71	3.23	2.64
16	修士またはそれ以上の学位を持っている	2.64	2.64	2.54	2.43
17	習得が困難なことと容易なことをよく知っている	3.3	3.28	3.19	3.09
18	授業を楽しくする	3.6	3.73	3.47	3.57
19	宿題を適度に出し、きちんとチェックする	2.81	2.81	3.01	2.98
20	進学や就職などの知識が豊富である	3.41	2.87	3.36	2.71
21	すべての学習者に公平である	3.67	3.69	3.59	3.57
22	正しい発音やアクセントで流暢に話せる	3.6	3.82	3.28	3.7
23	日本語以外のことにも相談にのってくれる	3.31	3.29	3.14	2.97
24	日本語教育に関する資格を持っている	3.13	3.06	3.03	2.88
25	日本語だけで授業をする	2.39	3.09	2.54	3.3.0616
26	日本語と学習者の母語を比較しながら教える	3.33	3.12	3.1	2.73
27	日本語の教授経験が長い	2.81	2.63	2.62	2.89
28	日本人の考え方や思考方法を理解している	3.4	3.51	3.18	3.54
29	日本の歌やドラマ・アニメなどを紹介してくれる	3.35	3.49	3.03	3.45
30	日本の歴史や文化・習慣などについて深い知識がある	3.55	3.7	3.28	3.54
31	日本文化を授業の中で体験させてくれる	3.37	3.6	3.15	3.49
32	話すこと・聞くことを中心に教える	3.38	3.57	3.04	3.48
33	文法や語彙を学習者の母語で説明する	3.13	2.94	3.26	2.88
34	文法や語彙を日本語で説明する	3.24	2.87	3.4	2.68
35	ペアワークやグループワークを積極的に取り入れる	2.66	2.99	2.68	3.12
36	翻訳や通訳の練習を取り入れる	3.12	2.97	2.98	2.86
37	読むこと・書くことを中心に教える	3.02	2.76	3.07	2.76
38	学習者だった時の経験を活かして教える	3.37		3.35	
39	日本への留学経験がある	3.08		2.84	
40	日本語能力試験（JLPT）でN1に合格している	2.92		2.8	

※N = ネイティブ教員, NNT = ノンネイティブ教員。